高度経済成長期の保育雑誌にみる「自然」の問題

—「自然」概念に焦点を当てて—

白井 美沙子*

"Nature" Issues in Nursery Magazines in High Economic Growth Period:

Focusing on "Nature" Concept

Misako SHIRAI

Abstract

The purpose of this study is to analyze people's "Nature" concept in nursery magazines entitled "Youji no Kyoiku (Early Childhood Care and Education)" and "Hoiku (Educare)", focusing on the articles that were published in high economic growth period in Japan (1955-1973).

For this purpose, (1) I sampled the articles including the word "Nature" in the titles or subtitles, (2) I analyzed these articles to clarify what kind of issues related to "Nature" there were in this period, (3) I discussed the concept of "Nature" they had.

The following three things were revealed. First, some authors had some doubt about the changes of environment and lifestyle high economic growth and development had caused. Second, some authors thought that science education is important. On the other hand some authors insisted on the importance of the cultivation of aesthetic sensitivity. Third, most authors thought that "Nature" is something separated from human beings.

Keywords: nursery magazine, nature, concept, high economic growth

1.　研究の背景

近年、保育界では、「自然」とのかかわりを重視する主張が少なからず聞かれる。

例えば、有賀（2008）は乳幼児期における「環境保育」[1] を紹介し、「この時期の子どもが自然との関係を強く深くもつこと、すなわち、自然との豊かなかかわりをもち、さまざまな種類の自然体験をたっぷり味わうことがとても重要」（p. 29）と述べ、自然とのかかわりを重視した保育実践を提唱している。また、汐見（2013）も「大人たちはもっと意識的に、子どもたちに豊かな自然を体験させ、さらに、感じたことを言葉や絵、造詣、音楽、身体パフォーマンスなど、様々なメディアで形にすることを励ましていく必要がある」（p. 149）と、子どもが「自然」を体験することの重要性を訴えている。

キーワード：保育雑誌，自然，概念，高度経済成長，保育

* お茶の水女子大学大学院博士前期課程 2015 年度修了

現行の幼稚園教育要領（2008）においても、特に領域「環境」において、「身近な環境に親しみ，自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」ことが「ねらい」に示されていることからも、現在の日本の保育において、「自然」とのかかわりが重視される傾向があると考えられる。

このように保育界で「自然」が問われるのは、今日に限ったことではない。大正期にはすでに倉橋（1917）が「近頃の都会生活の最大の不幸は四季の自然を知らぬことである」（p. 365）と、都会生活における「自然」の問題を述べており、その後も保育関係者が「自然」に関わる様々な実践を行ってきたことが、紹介されている。例えば、布村（2005）は、野村芳兵衛[2]の取り組みを紹介し、野村が「大人が自然の意義を認識し、幼児期に自然の中で、自然物を使って十分に遊ぶことへの責任を自覚しなければならないと捉えていた」（p. 35）と記している。大須賀（2013）は、「大地保育」を創始した塩川豊子[3]（1915-1999）の「大地保育とは、太陽と水と土に象徴される自然を充分に取り入れる自由保育方式の総称」（p. 74）との言と、その実践を紹介している。「自然」を保育に取り入れた実践が伺える。

この他にも「自然」を重視した保育実践が紹介・提唱されており、保育界では「自然」が長きにわたって注目され、くり返し議論されてきたと考えられる。

しかし、「自然」にまつわる様々な主張や実践は、一見同じような内容でも、時代や個人によって異なる意味を含んでおり、その中で語られる「自然」の概念も一致しているとは限らない。「自然にかかわる」、「自然と触れ合う」、「自然に親しむ」とは、具体的にどのような行為を指すのか、そもそも「自然」とは何かという根本的な問題はあまり議論されていない。

今日の人々の「自然」に対する意識は、高度経済成長期に形成された部分が大きいという説がある。内山（2014）は「自然」という言葉は「明治以降ヨーロッパの自然科学的自然認識にもとづく自然観が移入されてくる過程で、今日のような意味になっていった」（p. 53）と述べ、「自然」が人間の外に存在する客観的な体系として対象化されるようになっていったことを指摘している。一方で、内山は、日本で「自然」についての議論が開始されるのは1970年代に入って「開発か自然保護か」（同上 p. 11）が課題になり始めてからであるとも記している。つまり、明治以降に根付いていった客観的な体系としての「自然」という認識の上に、高度経済成長期における開発の進行という全国的な変化が起こったことが、今日の人々の「自然」の捉え方や「自然」に対する問題意識を形成していると考えられる。

では、高度経済成長期における開発の進行という変化の中で、子どもをとりまく環境の変化はどのようなものであったのだろうか。

仙田によると、昭和30年（1955年）代 から「都市化が進み、空き地がなくなり、川が汚染され、道路は自動車によって占領され、子どもの遊び場は急激に失われ始めた」（p. 193）と、遊び場の減少を指摘し、この問題は戦前では東京や大阪のような大都市の問題であったが、戦後になって「全国的な問題として展開されてきた」（p. 194）と述べている。高度経済成長期において、開発の進行に伴い、子どもの遊び場の減少が問題となっていたことが示唆されている。

児童文化の観点からは、首藤（2006）が1960年代生まれの人々を「テレビ世代」と呼び、「高度経済成長期の子どもの生活を一変させたのは、1953年以降の一般家庭へのテレビの普及と1960年のカラー放送である」（p. 100）とし、テレビの「長時間視聴」や食事をしながらテレビをみる「ながら視聴」が問題視されていたことを紹介している。

本田（2008）も、1960~1970年を、「わき目も振らずに働く親たちと、将来のためにと管理の強化された学校の支配下で、不満を堆積させる子どもたちとが住空間だけを共有しつつ各個ばらばらに暮らしていた時代」（p. 13）と称し、「かぎっ子」が社会問題としてメディアに取り上げられるなど、親の労働時間の延長と、学校における受験競争の激化や管理教育による子どもの孤立化・孤独化を指摘している。

このように、高度経済成長期には、都市化・開発の進行に伴い、子どもを取り巻く環境や生活に変化が起こっていたことが指摘されている。昭和48年（1973年）に出版された『子どもが危ない（下）』（上田, 1973）の中でも、「コンクリート・ジャングルの中のこどもたち」と題し、日本の宅地開発が「自然と

人間を調和させる本当の町づくりではなかった」（p. 141）と述べられているように、開発の進行が、「自然」の問題としても意識されるようになっていたことが伺える。都市化・開発の進行は、人々の中で、「自然」という言葉が強く意識される、契機となったのではないだろうか。

このことは保育界も例外ではなく、幼稚園教育要領（1956, 1964年改訂）において、領域「自然」が導入されたことからも、高度経済成長期下には、「自然」という言葉が大きく位置づいていったと考えられる。

本研究では、「自然」の議論が広がっていく一つの転機となった、高度経済成長期において、保育界で「自然」に関してどのようなことが問題となっていたのか、また人々が「自然」をどのように捉えていたのかを検討する。

2.　目的と方法

本研究においては、高度経済成長期の保育界において「自然」がどのように捉えられていたのか、つまり「自然」概念[4]を手掛かりに、「自然」についてどのような問題が議論されていたのを検討することを目的とする。

検討対象は、高度経済成長期（1955年～1973年[5]）に発行された保育雑誌、『幼児の教育』および『保育』とし[6]、「自然」に関する記事のみを抽出した。

ここで、「自然」に関する記事を、「自然」をタイトルまたはサブタイトルに含む記事とし、以下、「自然」の記事と表記する。

抽出された記事の内容分析として、①各記事の中で言及されている内容から、当時の保育界で「自然」に関連してどのようなことが問題となっていたのか（以下「自然」の問題とする）、また、②各記事において「自然」の語が使用される文脈から、執筆者の「自然」概念を検討した。

3.　検討対象について

(1) 月刊雑誌『幼児の教育』[7]

『幼児の教育』は、1901年にフレーベル会（日本幼稚園協会の前身）によって創刊され、現在まで続いている。

1955年～1973年には、定価は50～120円、年間の平均ページ数は55.5～72.0であった。編集責任者は1955年6月号まで倉橋惣三が担い、その後は津守真となっている。雑誌の副題は「家庭・保育所・幼稚園」であったことから、対象は保育所・幼稚園の保育者と、保護者を中心としていたと考えられる。

記事の内容は、随筆から実践紹介、研究報告、大会の記録など、多岐にわたる。

(2) 月刊雑誌『保育』[8]

雑誌『保育』は、1937年、全日本保育連盟によって創刊され、1974年4月より、月刊雑誌『月刊保育カリキュラム』と併合された。併合後は、『月刊保育とカリキュラム』として、現在まで続いている。

1955年～1973年には、定価は50～150円、年間の平均ページ数は56.0～101.0であった。編集責任者は豊田次雄、米谷之宏、島村励らであった。この間、雑誌の副題は「先生とお母さまの雑誌」から、「先生とおかあさまの雑誌」、「あすの子どもを育てる雑誌」、「保育を科学化するための雑誌」、「保育の現代化をめざす教育雑誌」へと、変わっている。ここからは、保育者および家庭の保護者を対象とした雑誌から、研究誌・専門誌としての特色も強めていったことが伺える。記事の内容も、サブタイトルに合わせて「保育を科学化するには」といった特集などが組まれている。

記事の内容は、『幼児の教育』同様、随筆から実践紹介、研究報告、大会の記録など、多岐にわたる。

4．　結果

4－1．抽出された記事

『幼児の教育』の 1955 年～1973 年の記事の中で、タイトルに「自然」の語を含む記事は、42 本（ページ数は全体の 1.3%）抽出された。

記事の一覧は表 1 に示す。最左列は、筆者による記事の通し番号である。

表１　『幼児の教育』:「自然」の記事

Y	発行年月	タイトル	執筆者	掲載号	ページ
Y-1	1955年10月	自然観察の系統的指導（東京都教育庁指定幼稚園研究発表会<特集>）	友田 静恵	Vol.54 no.10	pp.13-19
Y-2	1955年11月	幼児と自然（研究発表）	佐々木 淑子	Vol.54 no.11	pp.34-39
Y-3	1955年12月	自然（研究協議）	記録	Vol.54 no.12	pp.32-36
Y-4	1956年7月	幼児の自然観察 トンボやセミをかわいがるこどもに	阿久沢 栄太郎	Vol.55 no.7	pp.26-29
Y-5	1956年11月	自然保育の実験報告	東京目白幼稚園	Vol.55 no.11	pp.44-47
Y-6	1957年6月	幼稚園の自然観察環境について：自然観察モデル幼稚園の構想	松村 義敏	Vol.56 no.6	pp.38-41
Y-7	1957年6月	南千住第二幼稚園　自然の環境設定（研究会・集会）	上野 初枝	Vol.56 no.6	pp.30-34
Y-8	1957年8月	幼稚園の自然観察環境について	松村 義敏	Vol.56 no.8	pp.46-51
Y-9	1957年9月	自然保育と史的背景	芦田 昇	Vol.56 no.9	pp.43-44
Y-10	1958年4月	自然（教師のための保育内容研究）	小松 原次郎	Vol.57 no.4	pp.36-39
Y-11	1958年6月	保育の工夫　自然をテーマにした保育	小林 名々子	Vol.57 no.6	pp.56-59
Y-12	1958年7月	自然観察について（日ごろ努力していること）	清水 さよ子	Vol.57 no.7	pp.15-19
Y-13	1958年9月	胎教の自然科学的基礎についての検討（研究発表：第二日）（日本保育学会第十一回大会特集号）	田中 昌人	Vol.57 no.9	pp.51-51
Y-14	1958年9月	保育所における幼児と動物との関係について：自然観察のカリキュラム構成に関する一考察	樋口 三紀子	Vol.57 no.9	pp.21-21
Y-15	1958年10月	今後における　幼児の自然観察指導について	松村 義敏	Vol.57 no.10	pp.50-54
Y-16	1958年11月	自然（幼児教育実際指導研究会分科協議会より）	記録	Vol.57 no.11	pp.55-59
Y-17	1960年4月	自然観察について	山内 美子	Vol.59 no.4	pp.15-19
Y-18	1960年5月	幼稚園の教育：自然科学と社会科学：Nursery-Kindergarten Education：Ed. Jerome E. Leavitt（洋書紹介）	赤池 溥子	Vol.59 no.5	pp.61-64
Y-19	1960年10月	幼児の自然観察について：自然観察史を中心にして	山内 美子	Vol.59 no.10	pp.14-18
Y-20	1961年10月	遊びの中での"自然"の学習：科学的なもののめばえを育てるにはどうすればよいか	神沢 良輔	Vol.60 no.10	pp.42-48
Y-21	1962年2月	幼稚園教育指導書「自然編」を読んで	太田 次郎	Vol.61 no.2	pp.18-21
Y-22	1962年3月	自然観察における興味の重要性についての所感	山内 美子	Vol.61 no.3	pp.18-23
Y-23	1962年6月	自然の施設への配慮	高橋 系吾	Vol.61 no.6	pp.9-13
Y-24	1962年6月	「領域」について：特に「健康」「社会」「自然」について	坂元 彦太郎	Vol.61 no.6	pp.2-5
Y-25	1962年6月	幼児の自然教育について	太田 次郎	Vol.61 no.6	pp.6-8
Y-26	1962年6月	三才児と「自然」（幼稚園における「自然」の実際）	村井 トミ	Vol.61 no.6	pp.18-21
Y-27	1962年6月	四才児と「自然」（幼稚園における「自然」の実際）	富樫 純子	Vol.61 no.6	pp.21-25
Y-28	1962年6月	五才児と「自然」（幼稚園における「自然」の実際）	村石 京子	Vol.61 no.6	pp.25-28
Y-29	1962年9月	"自然"：第十一回幼稚園教育実際指導研究会協議会(お茶の水女子大学附属幼稚園)から	記録	Vol.61 no.9	pp.57-63
Y-30	1963年8月	自然領域についての研究の手引き 私の園の試み	浅羽 睦子	Vol.62 no.8	pp.22-26
Y-31	1964年1月	幼稚園教育要領の改訂案をみて：自然の領域を中心にして	神沢 良輔	Vol.63 no.1	pp.30-34
Y-32	1964年2月	幼稚園教育要領改訂案を見て：健康・社会・自然を中心に	角尾 稔	Vol.63 no.2	pp.54-57
Y-33	1964年6月	「自然」領域指導の問題点（新幼稚園教育要領について）	大場 牧夫	Vol.63 no.6	pp.14-17
Y-34	1965年8月	教材としての自然	牛島 義友	Vol.64 no.8	pp.2-5
Y-35	1965年11月	幼児の自然教育	中沢 和子	Vol.64 no.11	pp.26-29
Y-36	1965年11月	私の園の秋の自然物	松井 田鶴子	Vol.64 no.11	pp.30-33
Y-37	1967年5月	幼児の心理と教育(3) 幼児教育の現場の発展のために：領域「自然」とまと&	田中 敏隆	Vol.66 no.5	pp.39-43
Y-38	1971年3月	子どものあそびと自然（講演）	津守 真	Vol.70 no.3	pp.12-17
Y-39	1971年4月	日本人の自然観	太田 次郎	Vol.70 no.4	pp.40-44
Y-40	1971年10月	自然をとりもどす保育	塩川 寿平	Vol.70 no.10	pp.15-27
Y-41	1972年10月	自然のあそび	加奥 愛子	Vol.71 no.10	pp.31-35
Y-42	1972年12月	幼児のあそびにみられる領域自然における素材の最適化：幼稚園における指導例	松尾 龍一、楠見 久、片山 貞昭	Vol.71 no.12	pp.60-69

表１からは、タイトルに「自然」の語と共に、「観察」や「幼稚園教育要領」などの語がみられる。1962 年には「自然」の記事が多くなっていることが分かる。具体的な内容については後述する。

続いて、『保育』の 1955 年～1973 年の記事より、タイトルに「自然」の語を含む記事は、72 本（ペー

ジ数は全体の 1.4%）抽出された。記事の一覧は表２に示す。

表２　『保育』:「自然」の記事

H	発行年月	タイトル	執筆者	掲載号	ページ
H-1	1955年9月	随想：自然に親しむ心	根岸 草笛	Vol.10 no.9	pp.56-60
H-2	1956年7月	夏の自然の中に：観察を中心として	埴生 操	Vol.11 no.7	pp.18-24
H-3	1956年9月	秋の自然の中に：観察保育を中心として	埴生 操	Vol.11 no.9	pp.16-20
H-4	1956年10月	秋の自然の中に②：観察保育を中心として	埴生 操	Vol.11 no.10	pp.26-31
H-5	1956年12月	冬の自然の中に：観察保育をどのようにするか	埴生 操	Vol.11 no.12	pp.20-25
H-6	1957年9月	遠足と自然：園外保育の観察	栗山 晴光	Vol.12 no.9	pp.25-29
H-7	1957年11月	教育要領に基づく自然観察の一考察	友田 静恵	Vol.12 no.11	pp.18-19
H-8	1958年1月	一月の自然観察：静かな中に知る冬の面白い変化	栗山 晴光	Vol.13 no.1	pp.21-24
H-9	1959年1月	幼児の自然に対する生活と関心興味についての調査	蘆津 静江	Vol.14 no.1	pp.56-64
H-10	1959年7月	夏の植物の栽培と自然観察の実際例	友田 静恵	Vol.14 no.7	pp.22-25
H-11	1959年11月	自然環境の生かし方	埴生 操	Vol.14 no.11	pp.26-27
H-12	1960年4月	4月の自然の中から：ウサギの飼育と観察	埴生 操	Vol.15 no.4	pp.54-55
H-13	1960年5月	園外保育での指導の実践例：自然観察を中心とした指導の一例	滝 幸子	Vol.15 no.5	pp.10-12
H-14	1960年5月	5月の自然の中から：あさがおの栽培・継続的観察	埴生 操	Vol.15 no.5	pp.48-50
H-15	1960年6月	6月の自然の中から：カエルの習性と卵の成長過程の観察	埴生 操	Vol.15 no.6	pp.30-32
H-16	1960年7月	7月の自然の中から：昆虫の観察と飼育—水の中に住む小動物たち	埴生 操	Vol.15 no.7	pp.49-51
H-17	1960年8月	8月の自然の中から：セミの採集と観察	埴生 操	Vol.15 no.8	pp.50-51
H-18	1960年9月	「自然」の質問とそのとりあつかい方	山内 昭	Vol.15 no.9	pp.8-11
H-19	1960年9月	自然を生かそう：都会と農村	栗山 重	Vol.15 no.9	pp.12-15
H-20	1960年9月	「自然」から言語指導へ	右川 三枝子	Vol.15 no.9	pp.16-17
H-21	1960年9月	「自然」から表現活動へ：幼児の生命をゆさぶり心の躍動を深めるために	杉浦 しく	Vol.15 no.9	pp.18-20
H-22	1960年9月	領域の中における自然について	湯本 信夫	Vol.15 no.9	pp.21-25
H-23	1960年9月	9月の自然の中から：植物栽培を継続観察する—幼児らとともに(1)	埴生 操	Vol.15 no.9	pp.50-51
H-24	1960年10月	10月の自然の中から：植物栽培を継続観察する—観察指導の要点	埴生 操	Vol.15 no.10	pp.50-51
H-25	1960年11月	10月の自然の中から：落葉樹と落ち葉の観察	埴生 操	Vol.15 no.11	pp.52-53
H-26	1960年12月	自然観察指導が幼児に与えた影響	埴生 操	Vol.15 no.12	pp.36-37
H-27	1961年1月	1月の自然の中から：栽培スイセンの継続観察記・「ジグモ」の営巣の観察記	埴生 操	Vol.16 no.1	pp.38-39
H-28	1961年2月	2月の自然の中から：冬芽の観察をしました	埴生 操	Vol.16 no.2	pp.38-39
H-29	1961年3月	3月の自然の中から：アネモネの継続観察	埴生 操	Vol.16 no.3	pp.40-41
H-30	1961年6月	自然への興味：わたしの自然に対する興味と知識はこんなふうにつちかわれた	周 はじめ	Vol.16 no.6	pp.2-5
H-31	1961年6月	子どもはどんな虫でもすきである：自然に対する興味の芽を伸ばしてやりましょう	辻本 修	Vol.16 no.6	pp.6-7
H-32	1961年6月	自然の中の子ども：春の支度をしている芽・雑草園・花を折らない子ども	豊田 次雄	Vol.16 no.6	pp.8-9
H-33	1962年4月	自然の中で<1>：春を告げる鳥たち	周 はじめ	Vol.17 no.4	pp.24-25
H-34	1962年5月	自然の中で<2>：カマキリとミズムシ	辻本 修	Vol.17 no.5	pp.32-33
H-35	1962年6月	自然の中で<3>：コウモリ	今泉 吉典	Vol.17 no.6	pp.32-33
H-36	1962年7月	自然の中で<4>：ホタルブクロ	松田 修	Vol.17 no.7	pp.32-33
H-37	1962年8月	自然の中で<5>：夏鳥の歌	周 はじめ	Vol.17 no.8	pp.20-21
H-38	1962年9月	自然の中で<6>：鳴く虫	辻本 修	Vol.17 no.9	pp.32-33
H-39	1962年10月	自然の中で<7>：シカ	今泉 吉典	Vol.17 no.10	pp.30-31
H-40	1962年11月	自然の中で<8>：サザンカ	松田 修	Vol.17 no.11	pp.36-37
H-41	1962年12月	自然の中で<9>：冬鳥の歌	周 はじめ	Vol.17 no.12	pp.30-31
H-42	1963年1月	自然の中で<10>：冬の虫達—ガの仲間	辻本 修	Vol.18 no.1	pp.30-31
H-43	1963年2月	自然の中で<11>：ツバキ	松田 修	Vol.18 no.2	pp.30-31
H-44	1963年3月	自然の中で<12>：ギフチョウ	六山 正孝	Vol.18 no.3	pp.28-29
H-45	1963年3月	領域「自然」の問題点	記録	Vol.18 no.3	pp.36-45
H-46	1963年5月	5月の保育計画の考え方と実践例：領域「自然」を中心として	白井 教子	Vol.18 no.5	pp.10-14
H-47	1963年5月	5月の基本的生活習慣：領域「自然」を中心とした実践例	滝 幸子	Vol.18 no.5	pp.15-17
H-48	1963年5月	科学する心にも情操の陶冶を：領域「自然」を中心として	北村 祐諦	Vol.18 no.5	pp.18-21
H-49	1964年5月	六領域の史的再検討：④「自然」編	小林 実、山内 昭道	Vol.19 no.5	pp.17-31
H-50	1964年6月	六領域別教材研究：自然1：キンギョについて	山内 昭道	Vol.19 no.6	pp.34-35
H-51	1964年7月	六領域別教材研究：自然2：アサガオについて	山内 昭道	Vol.19 no.7	pp.29-30
H-52	1964年8月	六領域別教材研究：自然3：ニワトリについて1	山内 昭道	Vol.19 no.8	pp.36-37
H-53	1964年9月	六領域別教材研究：自然4：ゴム風船について	山内 昭道	Vol.19 no.9	pp.26-27
H-54	1965年8月	自然領域の指導：実践記録	平竹 洋代	Vol.20 no.8	pp.7-12
H-55	1965年8月	自然領域の指導：問題点の掘り起こし	大場 牧夫	Vol.20 no.8	pp.13-14
H-56	1965年8月	自然領域の指導：実践記録を理論的に高めるには	湯本 信夫	Vol.20 no.8	pp.15-18
H-57	1966年2月	教材研究<領域・自然>：物理教材をめぐって	山内 昭道	Vol.21 no.2	pp.24-31
H-58	1966年3月	教材研究<領域・自然>：物理教材をめぐって2	山内 昭道	Vol.21 no.3	pp.24-26
H-59	1966年12月	領域「自然」のめざすもの：二義性を生かす	保育科学研究会	Vol.21 no.12	pp.21-25
H-60	1967年10月	保育内容の再検討：興味と関心(1)自然事象への興味や関心	山内 昭道	Vol.22 no.10	pp.21-25

※表２は次頁に続く

H	発行年月	タイトル	執筆者	掲載号	ページ
H-61	1968年10月	Bグループ(自然)研究報告：幼児は自然をどのようにとらえてものを見たり考えたりするか	研究グループ	Vol.23 no.10	pp.89-95
H-62	1968年11月	小学校の理科と幼稚園の"自然"の教育：飼育栽培を中心に	蛯谷 米司	Vol.23 no.11	pp.32-37
H-63	1969年1月	実践記録2：自然観察と創作童話	兵庫・播陽幼稚園	Vol.24 no.1	pp.15-20
H-64	1970年9月	巻頭言「積乱雲」：幼児に自然の親しみを	平井 信義	Vol.25 no.9	pp.1-1
H-65	1971年12月	幼児教育の問題点と今度の課題⑨：領域「自然」の問題点	関西幼児教育研究会	Vol.26 no.12	pp.43-48
H-66	1972年4月	巻頭言：自然から学ぶ	不明	Vol.27 no.4	pp.1-1
H-67	1972年8月	巻頭言：自然の心を知らない子ども	不明	Vol.27 no.8	pp.1-1
H-68	1972年8月	47年度幼稚園教育課程研究集会：領域・自然	富田 陽子	Vol.27 no.8	pp.62-65
H-69	1973年2月	保育の原点・現代の幼児と「保育」の接点を解明する11：自然の認識と教育	細谷 純	Vol.28 no.2	pp.8-13
H-70	1973年8月	巻頭言：自然にふれることから	山内 昭道	Vol.28 no.8	pp.1-1
H-71	1973年9月	保育の限界と可能性：幼児教育における『自然』と『文化』	坂元 彦太郎	Vol.28 no.9	pp.8-13
H-72	1973年9月	わが園の歩み：自然とともに生活する子どもたち	亀井 和子	Vol.28 no.9	pp.62-65

表２より、『保育』では『幼児の教育』よりも記事数が多くなっていることが分かる。これは、全体のページ数が多いことも影響していると考えられるが、雑誌全体に占める「自然」の記事の割合も約 0.1%高くなっており、編集方針の違いもあると推測される。

４－２．「自然」の問題

『幼児の教育』及び『保育』の「自然」の記事において、当時の保育界で問題となっていたことや、筆者の問題意識が表れている文章を抽出した。

抽出した文章から、言及されている問題について検討したところ、表３のカテゴリーに大別された。

各カテゴリーに分類された記事の本数は右列に記した。

表 3　「自然」の問題

	言及されている内容	記事数
(1) 社会的な問題	① 都市化、開発の問題	20
	② その他の社会的な問題	14
(2) 保育現場での問題	① 保育内容の扱い方、保育のあり方	83
	② 保育中の子どもの実態	19
	③ 保育内容の領域化、領域の内容に対する賛否	8
	④ 保育現場におけるその他の問題	7

(1) 社会的な問題

① 都市化、開発の問題

表３に示したように、記事の中で言及されている「社会的な問題」に関しては、「大都会で子どもが親しむべき自然が失われてきていることがあげられています。子どもが自由に遊べる小川や野原は都会にはなくなってしまい、毎日、土を踏むこともない生活が多くなってきました。」（Y-35）、「このごろ、公害などによる自然の破壊がよく問題にされている。…(中略)…そういった自然を回復することは非常に困難なことであろう。」（H-71）といった、都市化、開発の問題に関する言及が中心であり、20 本であった。

② その他の社会的な問題

「現代の都会の子どもたちは、自然と接する機会が少なくなり、遊びも、昔のように自然のもので玩具をつくり、遊びを考えることが少なくなってきた。」（Y-41）、「いろいろな遊び場のある地方でさえ、子どもたちは家に閉じ込められ、テレビの前にひきつけられている」（H-70）など、生活のあり方などに

言及したものがあった。また、「文明が高度に進み、その恩恵に浴する生活が多くなると、自然に親しみ、「素朴な子ども心」を失っている子どもが増加してくるのではあるまいか」（H-64）といった人の心の変化について述べたものなど、あわせて14本であった。

(2) 保育現場での問題

検討している雑誌が保育雑誌であるため、保育現場での問題が、社会的な問題に比べて多かった。

① 保育内容の扱い方、保育のあり方

中でも、保育内容の扱い方、保育のあり方に言及したものが最も多く、83本であった。

内容としては、教材の選択や扱い方について、研究会の中で、蟻の飼い方について研究者に尋ねる（Y-3）など、動植物の扱いに、保育者が試行錯誤していた姿がうかがえた。教材の選択が画一的であることへの批判もあり、「アサガオ・チューリップ・小鳥・キンギョと、老人趣味的な飼育・栽培教材が保育中心に取り上げられてきたことに対するダウトは大いに必要」（H-55）といった言及もあった。また、教材として「ゴム風船」が紹介される（H-53）など、動植物だけでなく物理教材のもつ教育的価値を見直す必要があることなども、主張されていた。

保育者のあり方に関して、「まず先生自身が自然に親しむこと」(H-31）、というように保育者の姿勢について述べたものや、「ただ漠然と幼児たちの活動をみているのではなく、目標に照らし合わせて、幼児の活動をみ、そこから次の指導の計画を」(H-7)、というように、指導計画を作るうえでの手順などを示したものもあった。

科学的態度の育成について、「科学的な思考を伸ばす遊びが大切」(Y-6）、というように、いかに科学的態度を育てるかといった内容。また、「子どもらしさが失われてしまうのではないか」(Y-29)、「自然を直接身近に経験させることが、もっとも大切」（H-22）、などと、幼児に科学の知識を詰め込むことへの批判が述べられていた。当時行われていた「自然観察」について、「自然観察から科学的態度を教えることはむしろ困難である」との指摘もあった。

情操教育に関して、「机に向かった保育活動」や「知育」が重視され、子どもの人格そのものを育むことが疎かになっているという主張（Y-40）や、「動植物を愛護する精神」（Y-37）を養うべきであるといった主張がみられ、当時の科学教育に対する批判もあった。

小学校の理科との関係について、関連性を意識しつつも、「幼稚園では理科の下準備をやるのではなく」(H-62）、というように、幼児期の教育における独自性を大事にするべきであるという主張があった。

その他、農村と都会を対比し、それぞれどのような保育が必要であるか、また環境をどう生かすかなどが述べられているもの、幼児の「質問」にどう答えるか、また幼児がどうしたら疑問をもち「質問」をするのかについて考察したもの、「環境を自然に近づけていくことはできる」(Y-6）、など、保育環境をどのように構成するか、また管理していくかを述べたもの、などがみられた。

② 保育中の子どもの実態

次に多かったのは、こどもが変わってきているなど、保育中の子どもの実態について述べたもので、19本であった。

③ 保育内容の領域化、領域の内容に対する賛否

続いて、保育内容の領域化、領域の内容に対する賛否を述べた記事は8本であった。「筆者はかねがねたとえ便宜上からでも、幼稚園教育をこのような領域別に分けることに疑問を有していたし、幼児の発達を無視した知識のつめ込み方式に陥らせるおそれを感じていた」(Y-21）、「各項目の表現が簡潔なため、これをどう展開してよいかわからない」（H-7）というように、幼稚園教育要領の保育内容に疑問を抱く声や、現場での戸惑いを表したものが中心であった。

④ 保育現場におけるその他の問題

その他としては、子どもの評価、保育者の養成などについて述べられたものなど、合わせて７本であった。

以上、各記事の中での言及内容から、当時の保育界で議論されていた問題が伺えたが、当時の人々の関心を表すキーワードとしても、「チューリップ病」、「自然に帰れ」、「アニミズム」、「レディネス」、「コンピューター時代」といった言葉がいくつか見られた。特に、「科学的態度」「科学教育」「科学性」「自然科学」など、「科学」という言葉は多くの記事で使われており、「自然」との結びつきが強いことが分かる。「観察」という言葉も多く、「自然観察」が保育の中で大きな位置を占めていたことがうかがえる。これは、1956 年に幼稚園教育要領が公示される以前、保育要領（1948）において項目「自然観察」があったことの影響があると考えられる。このことは、後に検討する「自然」概念にも大きく関係すると考えられる。

４−３．「自然」概念

次に、「自然」の語を含む文の記述のし方や記事全体の文脈から、人間と「自然」との関係という視点で執筆者の「自然」概念を検討した。

「〇〇は…と述べているが」といった他者の言葉の引用部分は、それに対する各記事における執筆者の賛否によって、それが執筆者にとっての「自然」概念であるかどうかを判断した。

副詞や形容詞的に使われている「自然」の語、つまり「自然な流れ」や「自然に…なる」、などは省き、名詞的に使用されている「自然」の語のみを検討の対象とした。

結果、以下３つのカテゴリーに大別された。

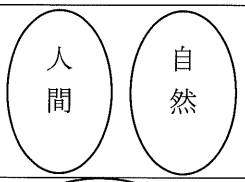
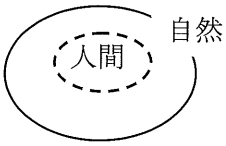
「自然」概念	内容	「自然」と人間の関係	記事数
(1) 人間の外の「自然」	「自然界」「自然観察」「自然物」など、「自然」を、人間の外にあるものとして記述しているもの		109
(2) 人間の中の「自然」	「人間自然」や「幼児の自然」など、「自然」を、人間の本来持っている性質として記述しているもの		3
(3)人間を内包する「自然」	「人間は自然の一部である」など、「自然」を、動植物同様に、人間もその中に内包するものとして記述しているもの		2

図１　「自然」概念

図１より、執筆者の「自然」概念として、ほとんどが人間の外の「自然」という概念によって、「自然」を記述していた。

(1) 人間の外の「自然」

「自然」を人間の外にある、客観的なものとして記述している記事は 109 本であった。

ここで、「自然」と人間との関係をより詳しく検討するため、「自然」を人間の外にあるものとして捉

えた場合、人間の「自然」に対する関わり方をどのように記述しているかに注目したところ、以下の内容に分類された。

表 4　「自然」に対する関わり方

	内容	記事数
①科学・観察の対象	「自然観察」、「自然科学」など、「自然」を科学・観察の対象として記述しているもの	84
②愛護・養育の対象	「自然愛護」、「自然を愛する」など、「自然」を護る・慈しむ・大切にする・育てる対象として記述しているもの。	67
③利用・採集の対象	「自然を取り入れる」、「自然を利用する」など、遊び、生活、芸術活動、教材などのために、「自然」（または自然の一部）を利用する・扱う・集める・採るという記述をしているもの。	37
④活動の場	「自然の中で科学的態度が養われる」、「自然の中で情操が育まれる」など、「自然」を学び･遊びなどの、活動の場としてとらえて記述しているもの。	33

表2から、「自然」を人間の外にあると捉えた時、人と「自然」をつなぐものは、科学・観察・飼育栽培・採集などが中心であったことから、「自然」を客観的な対象として捉える傾向があったといえる。この中では、①科学・観察の対象として記述されているものが、84本と最も多くなっている。

また、「自然」を場として記述しているものもあったが、園庭や遠足の行き先などを指しており、日常生活の場というよりも活動の場として捉えられていたことが分かった。

(2) その他

「自然」を人間の中にあるものとして記述している記事は3本、「自然」を人間をも内包するものとして記述している記事は2本であった。人もまた、「自然」の一部であるという概念や、人の中にも「自然」があるという記述はごく少数の記事であった。

4−4．まとめ

(1) 「自然」の問題

高度経済成長期、都市化や開発によって「自然」が失われていくこと、「自然」に接する機会が無くなってきたこと、人間の本来の性質としての「自然」から離れていっていることなど、が問題とされていた。それによって「最近の子ども」が、「自然」にふれたり、「自然」から学んだりすることが難しくなり、室内にこもりがちの生活で、「自然」に対する興味・関心がうすいという問題意識もあったことが分かった。

また「自然」を観察すること、動植物を飼育栽培・採集することなどを通して、幼児の科学的態度や科学性を育むことが、目指されていた。しかし、それでは科学性は身につかないとのことから、物理的な教材なども取り入れるべきであるとの声もあった。一方で、科学性の育成を行う際にも、動植物の飼育・栽培を通して、「自然」への親しみや愛情を育むべきであるとの声もあった。科学教育が盛んになる一方で、情操面の育成も必要であるとのことから、「自然愛護」の精神、動植物への愛情を育むことや、「自然」に親しみを持つことなどが目指されていたことが伺えた。

(2) 「自然」概念

本研究の結果からは、高度経済成長期の保育界において、「自然」を人間の外にある、客観的な行為の対象としてとらえる傾向が強かったと考えられる。

高度経済成長期においては「自然」を人間の外にあるものと捉える傾向があったことが示唆され、動植物だけでなく、人間をも内包する「自然」という概念、つまり自然の中に人間及び人間の生活があるという概念は、ほとんどの執筆者が持っていなかったと考えられる。

5．　総合考察

5－1．「自然」の問題と「自然」の概念

本研究で検討を行った保育雑誌の記事からは、「都市化」によって開発が進み、子どもの「自然」に親しむ場が失われてきていること。また、都市部・地方にかかわらず、子どもが室内にこもりがちであり、テレビにひきつけられていることなどが、保育界でも問題視されていたことが示唆された。

このように、「自然」が人間から離れたものになっていったために、「自然」を人間の外にある客観的な対象としてとらえる傾向が強まっていったとも考えられる。「自然」を客観的にとらえるものである「観察」や「科学」などといった言葉が多く見られたことからも、「自然」と人との距離が伺える。

5－2．領域「自然」との関連性

科学教育や情操教育の一環として「自然」を観察すること、「自然」を愛護する心を養うことなどが重視されていたことから、客観的な「自然」という捉え方が浸透していたことが示唆された。

これには、国家的な科学教育の振興を受けて、幼稚園教育要領の内容でも、領域「自然」において、科学的な芽生えを養うことと、動植物を愛護し、「自然」に親しむということが意識されていたことが、大きく影響したと考えられる。

本研究で検討した記事の中には、幼稚園教育要領における領域「自然」に言及しているもの、またその内容を踏まえていると推察されるものが半数以上あった。よって、当時の「自然」概念には、公的なガイドラインが関連していると考えられる。よって、今後は領域「自然」の内容、また幼稚園教育要領が改訂され、5 領域となってからの変化などを検討していく必要がある。

6．　おわりに

近年、「自然体験」を重視した教育活動が様々な場、かたちで行われている。その中では「自然」を何らかの行為の対象や、活動の場としてだけでなく、人もまたその中に生きるものとして捉えることの重要性が問われるようになっている。

1953 年より、5 年に一度行われている全国調査、「国民性の研究」（統計数理研究所,2013）によると、かつて「人間が幸福になるためには」、「自然に従わなければならない」と回答した割合が、「自然を征服してゆかなければならない」と答えた割合よりも低かったが、1973 年以降、逆転している。2013 年の調査では、48%が「自然に従わなければならない」と回答している (p.45) 。

このような、「自然」を大切にしようという流れの中で、「自然」という言葉が頻繁に使われ、「人間も自然の一部である」、「自然を畏れる」、「自然と一体になる」などといった表現が為されるが、「自然」から離れた生活の中で、そのような感覚を恒常的に持っている者はどれだけいるのだろうか。語られる言葉が、どれだけの内実性を持っているのかについても検討が必要である。

また、本研究ではタイトルに「自然」の語を含む記事のみを検討したが、文中に「自然」の語を含むものは多数あったと考えられる。それらも合わせた、「自然」概念の検討も必要である。

[1] 有賀によると、環境保育とは、「乳幼児の人間的な発達に必要なあらゆる経験を豊かにさせることを含みつつ、その中でとくに意識的に自然との交流を多彩に彩ることから創り出される諸活動」（p.25）である。

[2] 野村芳兵衛は、「池袋児童の村小学校訓導として、大正自由教育を担った教師の一人」（布村,2005,p.34)で、高度経済成長下において、「自然あそび」を展開したとされている。

[3] 塩川豊子：夫の塩川寿介とともに、1956年、静岡県にて野中保育園を設立する。

[4] ここでいう「自然」概念とは、杉村(1992)がnatural conceptの訳語として扱っている自然概念とは異なる。natural conceptとは「我々が日常接している事物や事象に関する概念」(菅,1987,p.226)であり、自然という概念そのものを規定している。よって本研究では自然概念と区別して「自然」概念と表記する。

[5] 高度経済成長期の始まりと終わりの年については諸説あるが、ここでは1955年から1973年までとする。

[6] 1955～1973年に発行された保育雑誌は、他にも『保育の友』、『月刊保育カリキュラム』、『保育ノート』などがあるが、『幼児の教育』及び『保育』は価格帯や形式、内容及び対象とする読者層が類似しているため、同列に検討することが比較的妥当であると考えた。

[7] 2016年5月現在、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクションTea pot (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/) において、創刊～2013年までの記事が閲覧可能である。

[8] 国会図書館デジタルコレクションにおいて、館内限定であるが、ほぼ全ての記事が閲覧可能である。尚、日本図書センターより、復刻版が順次、出版されている。

参考文献

有賀克明, 2008, いつでもどこでも環境保育-自然・人・未来へつなぐ保育実践, フレーベル館.

井上美智子・無籐隆, 2010, 保育者の考える自然とのかかわりのねらいの実態―環境教育の観点からの分析, 教育福祉研究, 36, pp. 1-7.

内山節, 2014, 内山節著作集6―自然と人間の哲学 , 農文協.

大方美香, 1988, 幼児の自然観と保育, 日本保育学会大会研究論文集, 41, pp. 94-95.

大須賀隆子, 2012,「大地保育」を創始した塩川豊子の自由保育―創美の受容に焦点を当てて, 淑徳短期大学研究紀要, 51, pp. 127-149.

大須賀隆子, 2013, 創造美育の現代的意義―映画『絵を描く子どもたち』と「大地保育」の実践を手がかりとして, 帝京科学大学紀要, 9, pp. 71-80.

倉橋惣三, 1911, 外へ外へ, 婦人と子ども, 11（4）, フレーベル會, pp. 1-2.

倉橋惣三, 1917, 秋が来た, 同上誌, 17（10）, p. 365.

栗原直子・瀧川光治, 1999, 月刊雑誌『幼児の教育』にみられる幼児期の自然教育観の変遷, 聖和大学論集 27, pp. 203-218.

越中康治・杉村伸一郎, 2008, 保育者の自然観はいかにして形成されるか？（1）―「森の幼稚園」の保育者が語る現在の自然観, 幼児教育研究年報, 30, pp. 49-59.

汐見稔幸 2013, 本当は怖い小学一年生, ポプラ新書.

首藤美香子, 2006, 子どもの生活変容と児童文化, 皆川美恵子・武田京子（編）, 児童文化―子どものしあわせを考える学びの森, ななみ書房, pp. 99-100.

菅眞佐子, 1987, 自然概念の事例の典型性判断における発達的変化―4歳児、6歳児、大学生の比較, 心理学研究, 58（4）, pp. 226.

杉村健, 1992, 自然概念の獲得と発達に関する最近の研究, 奈良教育大学紀要, 41（1）, p. 121.

仙田満, 2009, こどもの遊び環境, 鹿島出版会, pp. 193-194.

高橋多美子・高橋敏之, 2007, 幼稚園教育における自然に関わる保育内容の変遷と今後の展望, 日本教科教育学会誌 29（4）, pp. 45-54.

田尻由美子・無籐隆, 2003, 幼稚園・保育所における自然環境と「自然に親しむ保育」の実態について, 日本保育学会大会発表論文集, 56, pp. 420-421.
統計数理研究所, 2013, 国民性の研究第 13 次全国調査—2013 年全国調査, p. 45.
布村志保, 2005, 幼児期における「自然あそび」の意味—野村芳兵衛の取り組みに着目して, 保育学研究, 43 (2) , pp. 34-41.
本田和子 2009, それでも子どもは減っていく, ちくま新書, p. 13.